

は如何にして国民に原子力の安全性を PR 出来るかが中心で、それらは議事録として残っているそうだが、そこでいろいろな PR 作戦が練られたという、しかし門外不出で明かではない。

電気事業連合会は、原発のイメージ向上を謀るため多数の著名人を起用して安全の PR を行った。勿論原子力に関してはなんの関係もない人達だ。

PR を積極的に行い、安全神話を流布するの当然のことで、悪いことではない、ただ問題は余りにも安全神話が先行してしまい、肝腎の安全対策が疎かになってしまったことだ。

安全神話を日本全国に染み込ませる、とりわけ重要なことは原発地域住民に安全神話を繰り返し染み込ませていくことで、原発稼動には地域住民の承認を必要とすれば、なおさら安全神話を信じてもらう必要があった。

東電の原子力担当副社長を辞して、1998 年の自民党から出馬、比例代表区で当選した、加納時男参議院議員がいる、氏は次の 2004 年の選挙でも再選され、自民党での原発推進派の筆頭として活躍した。

氏の著書「なぜ原発か」の一節で日本の原発の安全性を強調する「安全度抜群の根拠」の章の中での文を紹介する。

「核に敏感だから安全性が高い、被爆国・日本ならではの反応が、世界に冠たる技術を生んだ。チェルノブイリの事故は、核分裂を止めるのに失敗し、放射能を閉じこめることも失敗した例で、設計自体に問題あり、日本では考えられない。スリ・マイル島の事故は、冷やすのに失敗した例である。日本ではこれらを教訓に安全確保対策 52 項目をとりまとめ実施している。」と、原発の安全性を強調している。

加納議員はエネルギー - 政策基本法を議員立法で成立させるのに狂奔、東電の原子力発電所増強に議員の力を最大限活用して絶大なる国会からの応援団長として活躍した。

二期で政界を引退、その後はテレビで原子力発電推進派の論客として度々拝見していたが、事故後はなんと発言するか期待していたのに姿を見せなくなった。

安全神話を繰り返しているうちに、安全が当たり前のことになり、なんの疑念も不安も感じなくなってしまったのは、一般民衆よりも先に当事者達で、陶醉してしまったのか、自己暗示なのか、あり得ない想定外の安全対策なんか考える必要はない、安全神話を呪文のように唱えていればそれですむことだ。

あまり関係ないが、二世代前「神州不滅」を本気で信じて世界を相手に戦って完膚無きまで叩きのめされたことを思い出し、信ずることの怖ろしさを感じる。

福島第一原発事故後の外国人記者会見で、「世界唯一の被爆国である日本が世界第三位の原子力発電所を保有しているのはどうしてですか？」と質問があり、続いて「地震国日本としては安全管理が甘すぎたのではないか？」と質問されたが、納得のゆく答えはなかった。安全神話の PR が浸透し過ぎたから、とでも答えるべきでなかったでしょうか。